



大妻多摩中学校

二〇二四（令和6）年度

入学試験問題（第三回）

【国語】

時間 50分

2月2日（金）

【注意事項】

- 1 問題は15ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

一

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ところで、本を読むことと、インターネットの情報に触れることの間には大きな隔たりがあると、私は思う。情報に向かうときのこちらの^(注)スタンスである。インターネットの情報に向き合うとき、対象を「尊敬する」という気はなかなか起きない。感嘆することも稀だろう。

たとえばインターネット上のフリー百科事典「ウィキペディア」は、確かに情報として整備されているところがあり、私も使うことが多い。ただウィキペディアを情報として読んでいて、ウィキペディアを尊敬する気にはなかなかならないだろう。ウィキペディアは情報の集積であり、その集積のなかで自分に必要なものを拾っていくという意識は持つても、その知識を与えてくれた人を意識し、その人によって与えられた〈知〉への感謝や尊敬の念を持つことはまずないだろう。知識は人と結びついていると私は思う。結びついていると思いたいというのが正直なところ。「これはAさんの言ったことだ」「これはBさんが考えたことだ」というように、著者とセットで知識を受け取る。このことによって、著者へのリスペクトが生まれる。

しかしネットは情報がただで手に入る。とてもありがたい反面、著者を意識することも稀だ。^①こうした事情は、社会全体の、〈知〉に対するリスペクトを小さくしてしまった。特に人文系の〈知〉に対するその意識の低下は甚だしい。

ネットが普及し、本を買ったり新聞を読む必要がない、という人も多い。出版不況はもう20年以上にも及ぶ。単に情報がただで手に入るからわざわざ本を買わない、ということだけでなく、〈知へのリスペクト〉の低下も大きく関係していると思う。

現代の子どもたちは、本格的に本を読む前に、スマホに触れている。私はそういった幼い子どもたちが、インターネットを情報や〈知〉の提供源と最初から思っていることを危惧するものである。対価を払わず情報に接することで、強い興味や〈知へのリスペクト〉を持てなくなるからだ。

先程も述べたが、最近^②人文知へのリスペクトの低下を痛感する。^③人文知が^④理系の〈知〉と同じように大切なことはいまでもない。

基本にあるのは、自分ない〈知〉をどこで手に入れるか、ということだ。理系の〈知〉でも人文系の〈知〉でも、その〈知〉に接することで自分がどれだけ変わるかということが大切だ。知ることで見えることがあるし、気づくことがあるだろう。それは、なにか変化をもたらしてくれる。人にとって、特に若者たちにとって大切なのは、そういう自分と違うものに接する機会にバリアを張らないことだ。

以前に出版した『知の体力』（新潮新書）でも述べたことだが、^⑤ 本を読むということのいちばんの意味は、本に書かれている情報を得るということではないと私は考えている。本を読んで、新しいことを知る。これは知った内容に意味があるのではなくて、これまではこんなことも知らなかったのかという発見が大切なのである。「こんなことも知らなかった自分を知る、これが本を読むことの最大の意味だ」（『知の体力』）と私は思っている。そんな〈無知な〉自分に気がつかないと、世界は自分中心にまわる以外はない。他を知ることによって自己の位置を測りなおす以外に、自己を相対化する方法はないのである。そんな作業の中でこそ、〈無知な〉自分を知ること、〈知へのリスペクト〉も生まれるのである。

〈知へのリスペクト〉が失われたためか、研究者が近視眼的になっていると感じることが多い。自分の専門については漏れなく知識を持っているものの、専門外のことに興味を持たないのだ。^⑥ 人文の話や社会の話題などを持ち出しても、会話にならない理系の研究者は多くいる。

一方で文系の研究者にも科学全般^{ぜんぱん}への苦手意識があり、社会で理系の〈知〉が優位に扱^{あつか}われる現状に対して強く反発できないところがあるようだ。

その根底にあるのは、文系の〈知〉は「役に立たない」という^⑦ ではないか。「役に立つ」とは、何か便利になる技術、何億円もの儲けを生み出すシーズ（種）^{たね}を言うのだろうか。

植物の名前を一つ、星座の名前を一つ知っただけで世界は豊かになる。^⑧ 歌を一首知っているとまた彩^{いろど}りが増す。世の中の見え方が違ってきて、日々の生活に潤^{うるお}いもたらされる。日々の生活の豊かさ、世界の見え方の余裕こそ、すぐに「役に立つ」ことも増して、我々が限られた〈生の時間〉を生きていく上で、より大切ではないかと私は考えている。

〈知〉といえば理系の〈知〉であり、役に立つ研究こそを進めるべきという傾向には、繰り返し警鐘を鳴らしておく必要がある。

ながたかすひろ
(永田和宏「待つことが苦手になった私たち」『未来の科学者たちへ』〔角川書店〕より)

(注) スタンス——物事に取り組む際の姿勢や態度。

問1

——線部①「こうした事情は、社会全体の、〈知〉に対するリスペクトを小さくしてしまった」とありますが、どういうことですか。これについて説明した次の文章の X・Y・Z に入る言葉を、本文中からそれぞれ()内に書かれた字数で抜き出して答えなさい。

知識は X(一字) と結びついているため、本などから知識を得る際には、知識だけでなくそれを書いた著者のことも一緒に意識することになり、知識を与えてもらったことによる感謝の気持ちが生まれる。しかしインターネット上の情報はただで手に入るため、利用者は自分に必要な情報を Y(五字) という意識になってしまった。そこでは、その情報を書いた人については意識されないため、知識を与えてくれた人へのリスペクト、つまり Z(四字) を持つことはまぶなくなってしまう。以上のように筆者は考えている。

問2

——線部②「人文知へのリスペクトの低下」とありますが、その原因として最も適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分と違うものに接する機会にバリアを張ってしまうこと。

イ 文系の知識は儲けを生み出すと考えること。

ウ 社会で理系の〈知〉が優位に扱われる現状があること。

エ 文系の〈知〉は「役に立たない」と考えること。

問3 — 線部③「人文知」と、— 線部④「理系の〈知〉」との関係を言い表した言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から

ら一つ選び、記号で答えなさい。

ア 対比 イ 逆接 ウ 例示 エ 順接

問4 — 線部⑤「本を読むということのいちばんの意味は、本に書かれている情報を得るということではないと私は考えている」

とありますが、筆者の考える「本を読むということのいちばんの意味」を、本文中から十二字で抜き出して答えなさい。

問5 — 線部⑥「人文の話や社会の話題などを持ち出しても、会話にならない理系の研究者は多くいる」とありますが、研究者の

そのような状況を筆者はどのように指摘しているか。本文中から十四字で抜き出して答えなさい。

問6 ⑦ に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自己中心 イ 社会問題 ウ 固定観念 エ 苦手意識

問7 —線部⑧「歌を一首知っているとまた彩りが増す」とありますが、それはどういうことですか。世界の彩りが増すことの意味に

ついて次の短歌を例に挙げて話し合っている生徒の発言を読み、生徒Cの発言の□にふさわしい内容を、四十字以内で答えなさい。

波ひとつひとつがぼくのつま先ではるかな旅を終えて崩れる

(木下龍也『オールアラウンドユー』(ナナロク社)より)

生徒A 「『歌を一首知っているとまた彩りが増す』とあるけれど、世界の彩りが増すって、具体的にはどういう意味だろう」

生徒B 「——線部直後の『世の中の見え方が違ってきて、日々の生活に潤いがもたらされる』にヒントがあるんじゃないかな。

今まで日常の風景として何となく見ていた世の中の物に対して、まったく新しい別の見方が出来るようになって、まるで世界の色がひとつ増えたように世界がもつと輝いて見えると思うの。これが、世界の彩りが増すということじゃないかな」

生徒C 「なるほど、じゃあこの短歌を知ること、今まで『砂浜に押し寄せては消えていくただの波』として受け止めていた物

に、という新しい見方が加わって、その分だけ世界の彩りが増したことになるんだね。これからは波を見る度にこの歌を思い出して『豊かになった世界』に感動することができるようになって、素敵なことね!」

問8 —線部⑨「〈知〉」といえは理系の〈知〉であり、役に立つ研究こそを進めるべきという傾向には、繰り返し警鐘を鳴らしてお

く必要がある」とありますが、筆者がそのように考える理由を、本文を踏まえて四十字以内で分かりやすく説明しなさい。

問9 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本を読むことと、インターネットの情報に触れることとの間には隔たりがある。

イ 現代の子どもたちがインターネットから情報を得ることを危惧すべきである。

ウ これからの時代では理系の〈知〉よりも、むしろ文系の〈知〉の方が役に立つ。

エ 〈知〉といえは理系の〈知〉であり、役に立つ研究こそを進めるべきである。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

すると、そこへキツネがあらわれました。

「こんにちは」と、キツネがいました。

「こんにちは」と、王子さまは、ていねいに答えてふりむきましたが、なんにも見えません。

「ここだよ。リンゴの木の下だよ……」と、^①声がいいました。

「きみ、だれだい？ とてもきれいなふうしてるじゃないか……」と、王子さまがいました。

「おれ、キツネだよ」と、キツネがいました。

「ぼくと遊ばないかい？ ぼく、ほんとにかなしいんだから……」と、王子さまはキツネにいました。

「おれ、あんたと遊べないよ。^②飼いなされちゃいないんだから」と、キツネがいました。

「そうか、失敬^{しっけい}したな」と、王子さまがいました。

でも、じつと考えたあとで、王子さまは、いいました。

「へ飼いなすゝって、それ、なんのことだい？」

「あんた、この人じゃないな。いったい、なにさがしてるのかい？」

「人間さがしてるんだよ。へ飼いなすゝって、それ、なんのことだい？」

「人間ってやつあ、鉄砲^{てっぽう}もってて、狩^{かり}をするんだから、おれたち、まったく手も足もでないよ。ニワトリも飼ってるんだが、それよりほかには、人間ってやつにゃ、趣味^{しゅみ}がないときてるんだ。あんた、ニワトリさがしてるのかい？」

「ちがう、友だちさがしてるんだよ。へ飼いなすゝって、それ、なんのことだい？」

「よく忘れられてることだがね。へ仲^{なか}よくなるゝっていうことさ」

「仲よくなる？」

「うん、そうだと。おれの目から見ると、あんたは、まだ、いまじゃ、ほかの十万もの男の子と、べつに変わらない男の子なのさ。だから、おれは、あんたがいなくなつていいんだ。あんたもやつぱり、おれがいなくなつていいんだ。あんたの目から見ると、おれは、十万もの③とおんなじなんだ。だけど、あんたが、おれを飼いなすすと、おれたちは、もう、おたがい、はなれちゃいられなくなるよ。あんたは、おれにとつて、この世でたったひとりのひとになるし、おれは、あんたにとつて、かけがえのないものになるんだよ……」と、キツネがいました。

「なんだか、話がわかりかけたようだね」と、王子さまがいました。「花が一つあつてね……。その花が、ぼくになつてたようだけど……」

「かもしれないな。地球の上にや、いろんなことがあるんでねえ……」と、キツネがいました。

「地球の上の話してゐるんじゃないんだよ」と、王子さまがいました。

すると、キツネは王子さまの話に、たいそうつりこまれたようすでした。

「ほかの星の上の話かい？」

④

「いないよ、そんなもの」

「いや、どうも思いどおりにや、いかないもんだなあ」といつて、キツネは、ため息をつきました。

でも、キツネは、また、話をもとにもどしました。

「おれ、毎日同じこととして暮らしているよ。おれがニワトリをおつかけると、人間のやつが、おれをおつかける。ニワトリがみんな似たりよつたりなら、人間のやつが、またみんな似たりよつたりなんだから、おれは、少々たいくつしてるよ。だけど、もし、あんたが、おれと仲よくしてくれたら、おれは、お日さまにあたつたような気もちになつて、暮らしてゆけるんだ。足音だつて、きょうまで生きてきたのとはちがつたのがきけるんだ。ほかの足音がすると、おれは、穴の中にすつこんでしまう。でも、あんたの足音がすると、おれは、音楽でもきいてる気もちになつて、穴の外へはいだすだろうね。それから、あれ、見なさい。あの向こうに見える

麦ばたけはどうだね。おれは、パンなんか食^くやしない。麦なんて、なんにもなりやしない。だから麦ばたけなんか見たところで、思
い出すことつて、なんにもありやしないよ。それどころか、おれはあれ見ると、気がふさぐんだ。だけど、あんたのその金色の髪^{かみ}は
美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにや、そいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の麦をみると、あ
んたを思い出すだろうな。それに、麦を吹^ふく風の音も、おれにやうれしいうな……」

キツネはだまつて、長いこと、王子さまの顔をじつと見ていました。

「なんなら……おれと仲よくしておくれよ」と、キツネがいました。

「ぼく、とても仲よくなりたいんだよ。だけど、ぼく、あんまりひまがないんだ。友だちも見つけなけりやならないし、それに、知
らなけりやならないことが、たくさんあるんでねえ」

「じぶんのものにしてしまったことではけりや、なんにもわかりやしないよ。人間つてやつあ、いまじゃ、もう、なにもわかるひま
がないんだ。あき^あき^きの店で、できあいの品物を買ってるんだがね。友だちを売りものになっているあき^あき^きなんて、ありやしないん
だから、人間のやつ、いまじゃ、友だちなんか持つてやしないんだ。あんたが友だちがほしいんなら、おれと仲よくするんだな」

「でも、どうしたらいいの？」と、王子さまがいました。

キツネが答えました。

⑤「しんぼうが大事だよ。最初は、おれからすこしはなれて、こんなふうに、草の中にすわるんだ。おれは、あんたをちよいちよい
横目でみる。あんたは、なんにもいわない。それも、ことばつていうやつが、勘^{かん}ちがいのもだからだよ。一日一日とたつてゆくう
ちにや、あんたは、だんだんと近いところへきて、すわれるようになるんだ……」

あくる日、王子さまは、またやつてきました。

すると、キツネがいました。

⑥「いつも、おなじ時刻^{じく}にやつてくるほうがいいんだ。あんたが午後四時にやつてくるとすると、おれ、三時には、もう、うれしく
なりだすというものだ。そして、時刻^{じく}がたつにつれて、おれはうれしくなるだろう。四時には、もう、おちおちしていられなくなっ

て、おれは、幸福こうふくのありがたさを身にしみて思う。だけど、もし、あんたが、いつでもかまわずやってくるんだと、いつ、あんたを待つ気もちになっなていいのか、てんでわかりつつこないからなあ……きまりきまりがいるんだよ」

「きまりきまりって、それ、なにかい？」と、王子さまがいました。

「そいつがまた、とかくいいかげんにされているやつだよ」と、キツネがいました。「そいつがあればこそ、ひとつの日が、ほかの日とちがうんだし、ひとつの時間が、ほかの時間とちがうわけさ。おれをおつかけるかりうかりうどにだだって、やつぱりきまりきまりがあるよ。木曜日は、村のむすめたちとおどるんだから、木曜日きってやつが、おれには、すばらしい日なんだ。その日になると、おれは、ブドウばたけまでのして出るよ。だけど、かりうかりうどたちが、いつだだってかまわず、おどるんだだったら、どんな日もみんなおんなじで、おれは、休暇きゅうかなんてものがなくななつちまうんだ」

王子さまは、こんな話をしああっているうちに、キツネと仲よしになりました。だけれど、王子さまが、わかれていく時刻が近きづくくと、キツネがいました。

「ああ！ ……きつと、おれ、泣いちゃうよ」

「そりゃ、きみのせいだよ。ぼくは、きみにちちともわるいことしようとは思わななかった。だけどきみは、ぼくに仲よくしてもらいたたがつたんだ……」

「そりゃ、そうだ」と、キツネがいました。

「でも、きみは、泣いちゃうんだろ！」と、王子さまがいました。

「そりゃ、そうだ」と、キツネがいました。

「じゃ、なんにもいいことはないじゃないか」

「いや、ある。^⑦麦こむぎばたけの色が、あるからね」

それからキツネは、また、こうもいいました。

「もう一度、バラの花を見にいつてごらんよ。あんたの花が、世のなかに一つしかないことがわかるんだから。それから、あんたが

おれにさよならをいいに、もう一度、ここにもどってきたら、おれはおみやげに、ひとつ、秘密をおくりものにするよ」

王子さまは、もう一度バラの花を見にいきました。そして、こういいました。

「あんたたち、ぼくのバラの花とは、まるつきりちがうよ。それじゃ、ただ咲いてるだけじゃないか。だあれも、あんたたちとは仲よくしなかったし、あんたたちのほうでも、だれとも仲よくしなかったんだからね。ぼくがはじめて出くわした時分のキツネとおんなじさ。あのキツネは、はじめ、十万ものキツネとおんなじだった。だけど、いまじゃ、もう、ぼくの友だちになってるんだから、この世に一匹しかいないキツネなんだよ」

そういわれて、バラの花たちは、たいそう^⑧ きまりわるがりました。

「あんたたちは美しいけど、ただ咲いてるだけなんだね。あんたたちのためには、死ぬ気になんかなれないよ。そりゃ、ぼくのバラの花も、なんでもなく、そばを通ってゆく人が見たら、あんたたちとおんなじ花だと思うかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくには、あんたたちみんなよりも、たいせつなんだ。だって、ぼくが水をかけた花なんだからね。覆いガラスもかけてやったんだからね。ついたてで、風にあたらないようにしてやったんだからね。ケムシを——二つ、三つはチョウになるように殺さずにおいたけど——殺してやった花なんだからね。不平もきいてやったし、じまん話もきいてやったし、だまっているならいるで、時には、どうしたのだろうと、きき耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになった花なんだからね」

バラの花たちにこういって、王子さまは、キツネのところにもどってきました。

「じゃ、さよなら」と、王子さまはいいました。

「さよなら」と、キツネがいいました。「さつきの秘密をいおうかね。なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」

「かんじんなことは、目には見えない」と、王子さまは、忘れないようにくりかえしました。

「あんたが、あんたのバラの花をとてみたいせつに思ってるのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」

「ぼくが、ぼくのバラの花を、とてもたいせつに思ってるのは……」と、王子さまは、忘れないようにしていました。

「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。めんどろみたあいてには、いつまでも ⑨ があるんだ。まもらなきゃならないんだよ、バラの花との約束をね……」と、キツネはいいました。

「ぼくは、あのバラの花との約束をまもらなきゃいけない……」と、王子さまは、忘れないようにくりかえしました。

(サン＝テグジュペリ著 内藤濯^{ないどうあろう}訳『星の王子さま』〔岩波文庫〕より)

問1 — 線部①「声がいいました」とありますが、ここで使われている表現技法を、次のア～エの中から一つ選び、その記号で答

えなさい。

ア 擬人法^{ぎじん}

イ 反復法

ウ 倒置法^{とうち}

エ 体言止め

問2 — 線部②「飼いならされちゃいないんだから」とありますが、「飼いならされ」てはいない、というのはどういうことですか。

本文中の語句を用いて、十五字以内で答えなさい。

問3 ③ に入れるのに最も適切なものを、本文中から抜き出して一語で答えなさい。

問4 ④ には、次のア～エの四つの文が入ります。正しい順序で並べ替え、記号で答えなさい。

ア 「いないよ、そんな人」

イ 「うん」

ウ 「そいつぁ、おもしろいね。じゃ、ニワトリは？」

エ 「その星の上じゃ、かりうどがいるかい？」

問5

——線部⑤「しんぼうが大事だよ」とあり、友だちを持つのはどうしたらよいかという王子さまの問いにキツネはそうに答えています。キツネは、なぜ「しんぼうが大事」と言っていると考えられますか。その理由としてあてはまらないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 友だちを作るのには、時間がかかるものであるから。

イ 相手との距離感きょりは少しずつ縮まっていくものだから。

ウ 相手を正面から見るとはゆるされないものだから。

エ 勘違いかんちがひを避けるさために何も言わない必要があるから。

問6

——線部⑥「いつも、おなじ時刻にやってくるほうがいいんだ」とありますが、このような「きまり」がある方がよいのはなぜですか。具体的に三十字以上四十字以内で答えなさい。

問7

——線部⑦「麦ばたけの色が、あるからね」とありますが、それが「いいこと」であるというのはどういことですか。本文中の語句を用いて、具体的に三十字以上四十字以内で答えなさい。

問8

——線部⑧「きまりわるがりました」とありますが、「きまりがわるい」の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 不気味で気持ちが悪い

イ 直感的な能力に乏しい

ウ 不安定で落ち着かない

エ 体裁が悪く恥ずかしい

問9

⑨に入れるのに最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 権利

イ 責任

ウ 証明

エ 友情

三

次の各問いに答えなさい。

問1 次の①～⑤の文の——線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 私の将来の夢は、カンゴシになることです。
- ② 問題が起こったら、すぐに先生にホウコクしましょう。
- ③ 体育祭でクラスのケツソクがさらに強まった。
- ④ G7サミットが開かれ、カメイ国の首脳が広島に集まった。
- ⑤ 日本の皇族が、国王の戴冠式のためにイギリスにホウモンした。

問2 次の同じ意味のことわざ・慣用句の中には、ひとつだけ意味の異なるものが混じっています。意味の異なる一つを次のア～エ

の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① 貴重なものも、価値のわからない者には無意味であることのとえ。

ア 猫ねこに小判 イ 犬に論語 ウ 兎うさぎに祭文 エ 鬼おにに金棒

- ② その道に長じた者でも、時には失敗をすることがあるというたとえ。

ア 天狗てんぐの飛び損ない イ 豚ぶたもおだてりや木に登る ウ 弘法こうぼうにも筆の誤り エ 猿さるも木から落ちる

- ③ 不運が重なることのとえ。

ア 貧乏びんぼうくじを引く イ 弱り目に祟たたり目 ウ 踏ふんだり蹴けったり エ 泣きつ面に蜂はち

④ どんなにつらいことでも、がまんして努力を続けていれば、必ずむくわれることのたとえ。

ア 石の上にも三年

イ 待てば甘露かんろの日和あり

ウ 三日坊主ぼうず

エ 雨だれ石を穿うがつ

⑤ 手ごたえや効き目がないことのたとえ。

ア のれんに腕押うでおし

イ 豆腐とうふにかすがい

ウ ぬかに釘くぎ

エ 帯に短したすきに長し

以下余白

